

## 天明大飢饉の口伝について

相良 範子

長い雨と冷害のために戦後最悪の不作に見舞われた日本国です。大分県も例外ではありません。

それにつけて思ひ出されるのは、ほぼ二百年前の天明の大凶作と、それが引き金になって幕府に劇的な政權交代が行なわれたことです。すなはち、田沼意次に替わって松平定信が老中になりました。田沼の老中辭職が、天明六年（一七八六）です。この天明の時代は、貨幣經濟が発達して、江戸時代が発展の頂点に達していて、これ以上の發展をすれば、幕藩体制が持たないという段階まで来てしまった時代です。そこへ大飢饉がぶつつかって来たわけです。氣象学者による分析では、天明時代は、小氷河期であったそうです。

意次の手法は蝦夷（えぞ）地を開発したり、オランダや中国との貿易を拡大して収入を増そうとしました。即

ち自由化を促した政治でありましたが、この大飢饉によって“農本”に回帰しようとする松平定信へと政変があり、歴史は逆流いたしました。

五年もつづいた日本の天明の飢饉と同じ頃、欧州も異常低温がつづき、日本の浅間山とアイスランドの火山と大爆發が相次ぎ、火山灰が長期間北半球の日照をさえぎったからだという説もあります。

天明年間には、フランスではルイ十五世が天然痘で死に孫のルイ十六世が即位した時で、国庫はすでに空っぽであったと言われています。妃は有名なマリーアントワネットであります。一七八九年にフランス革命がおきて、ついにルイ王朝がほろびました。

世界的な大變動のなかで、天明の大飢饉は五年間続いたといわれています。この天明の大飢饉の時に私の先祖が行なったことで、私が母から聞いた口伝を史談会の方々にお披露いたしました。

私の母溝部ミツエは、大分県立第一高女や高田高女、京都府立女子専門学校の教授をして、溝部学園を創始いたしました。昭和三十九年八月三十日になくなりました。

が、一人子である私の幼い頃から母方の先祖の墓掃除に毎夏草取りに母子で行きました。お墓にある寿永二年などの銘のある五輪塔や十一面観音様のある観音堂には、以前史談会の皆様をご案内いたしました。そのお墓の草取をしながら、私が母に「お母さん、この一山あるお山になぜ松か杉を植えなかったのですか。すぐ建築材になるのに」と聞きましたら、母は「何を言うかえ、この山にシイの木やどんぐりの木があったので、天明の大飢饉の時に五ヶ村（古市・里屋〈今の亀川〉・平田・野田・



天明3年の奥州大飢饉の犠牲者で、鳥や犬が食っている。(凶荒図録より)

かまど)の人に、シイの実やどんぐりの実を何斗も貯えていて配ったので、餓死者が一人もでなかったのです。それで九右衛門というお爺さんの死後は、宵の明星が出たら、九右衛門屋が出たという供養踊りの口説きができたとそうよ」と聞きました。

また、お正月のかき餅に梅干のシソを干して粉にしたものをまぜて、少し厚いおかきにして貯蔵しました。いざ戦争とか、飢饉の時には、このおかきをお湯にいれればお雑煮になります。

土蔵には三年分の玄米、三年分の味噌・醤油・塩・大豆・粟・小豆・キビなどと、それに、さつまいも、里芋を貯蔵していました。

唯今のようにすぐ国民の主食が欠乏するような政治ではありませんでした。それぞれの領国を支配する人達や千哲の経営の血のにじむような努力を忘れてはならないと思います。

おわりに、つつしんで藤内先生のお冥福をお祈りします。先生とは同時代で大中や師範や第一高女に電車通学をいたしましたものです。